

留学生を案内する日本の本当の名所とその歴史 第 4 回

<冬の北海道編>

北海道というのは、日本において一種独特な文化のある場所です。北海道は、もともと日本人が「夏の北海道」と「冬の北海道」というように、姿を変える北の大地を楽しむということで、観光の名所でした。リゾートブームの時は、北海道のさまざまなところにリゾートホテルが立ち並び、観光の名所以外にもさまざまなできていました。

円高、そして不景気になって一時のリゾートブームはなくなり、日本人の観光客が少なくなります。スキーブームが無くなったりすると、その観光客の減少に追い打ちをかけるようになってしまうのです。そのようなときに北海道を訪れたのがオーストラリアやニュージーランドの人々です。南半球の人々にしてみれば、北半球は全く反対の季節。オーストラリアでは「サンタクロースは真夏に来る」ということで、サンタの服装をしたサーファーが、日本のテレビに映ることも少なくありません。夏にスキーのできる旅行先ということで、リゾートブームで整備されたスキー場とパウダースノーのある北海道に、南半球のスキー客が多数押し寄せる時代がありました。

そして最近になると、日本の円安の影響と、そうしたスキーをする環境の良さから、東南アジアの人々が「雪」を見るために、北海道に観光に来るようになっています。また中国人にとっても北海道というのは非常に魅力のあるところで

す。実はニセコの別荘地など、中国人に人気で中国人富裕層がかなり購入しています。先日などは、占冠村（しむかっぷむら）の星野リゾートトマムを183億で中国が買収したというような話もありました。北海道は、さまざまな意味で、人気の観光地です。

昨今では日本語学校の留学生もタイやミャンマーやベトナムなどから勉強をしに来ている人が少なくありません。東南アジアの人々は、赤道に近く暑い国ですから、当然に北海道に降る雪などは経験したことはありません。彼らには「雪」を見るだけでも十分に「観光」になってしまうのですが、しかし、それだけでは全く面白くないですね。

そこで、今回は、これから雪の季節の冬に向けて、その観光案内を少し早目にご紹介しようと思います。

なお、北海道は広いので、今回は「冬の北海道」と限定してご紹介しようと思います。冬の北海道は、雪を知らない留学生にとっては歩くのも困難ですし、長時間外にいと、はじめのうちは珍しい雪で遊べるものの、すぐに体が冷え切ってしまいます。そのために、「室内」で「暖かく」北海道を感じられるということを中心に紹介しようと思います。

1. 初級編

北海道の観光というと、どうしても「自然」「美食」となってしまいます。そもそも、北海道はどうして日本人の観光客が多かったのでしょうか。それは「都道府県の中で最も日本らしくない」という感覚があったからではないでしょうか。もちろん、北海道が日本ではないとかそのようなことを言っているのではありません。日本の本州には実は「広大な大地」というのがありません。日本の本

土の中で「地平線」を見ることができるのは、北海道が最も確率が高いということになります。本州は海に囲まれていますから水平線を見ることはそんなに難しくありませんが、地平線を見ようとしても、山などに遮られてしまうというのが現状なのです。

そのように考えると、よく「雄大な」と例えられる北海道の自然は、素晴らしい観光資源であるということが言えます。しかし、「北の大地」として「雪」と「寒さ」によって閉ざされる北海道の自然は、冬になると「自然の脅威」ともなるのです。北海道の開拓と生活の歴史は、この「自然との闘い」の歴史ではなかったかということができます。

「雪」に慣れていない留学生にとってもそのことは同じです。はじめのうちは「雪と戯れる」ことができるでしょうが、気が付くと身体が冷え切ってしまうなどということになるのではないのでしょうか。場合によっては風邪をひいてしまったりもしますね。実際に、自分で「雪」や「自然」の厳しさを知っていれば、当然に、昔の人の困難や苦労を知るだけでなく、「感じる」ことができるようになるのではないのでしょうか。

そのように「実感できる」という意味では、「開拓の歴史」を示すものが最もよいのではないかと思います。月並みですが「札幌時計台」「旧札幌農学校」などが代表的なものではないのでしょうか。冬の北海道でここを推薦するのは、まずなによりも雪の問題です。これら施設は「観光施設」ですから、雪かきなどもしっかりしていますし、また、そこまでの交通機関や道路もしっかりとしているということがあります。また、もし万が一事故があっても、都市部ですからその対処が早いということがあります。南方の雪を全く知らない、見たこともないという人が多数いらっしゃって、雪の事故があるということは、絶対に避けなければなりません。留学生をご案内するときもそのことは一緒です。ですから、当然に

「雪対策ができている観光施設」ということになるのです。

その上で、あえてこの二つを挙げさせていただきました。札幌の時計台というのは、実は旧札幌農学校の「演武場」址で、当時から日本人の開拓歴史を知っているだけでなく、明治 11 年に完成して以来 130 年間以上ずっと時を刻み続け、鐘を鳴らし続けているのです。もちろん、明治以来原形のまま残っている時計台は日本最古です。

その開拓の歴史が詰まっているのが「旧札幌農学校」要するに、現在の北海道大学農学部ということになります。札幌駅から徒歩 10 分と中心部にありながら、北海道らしい風景を楽しめるのが「北海道大学」です。大学は出入りが自由ですし、また大学内の博物館では北海道の歴史や地理を調べることもできます。

北海道の開拓は、もちろん、先史以前から行われており、平安時代に征夷大將軍が東北で「蝦夷」の討伐を行った際に、徐々に北海道に向かったといわれています。また、日本は古くから北海道、この蝦夷地をある意味で中央を追われた人の楽園であるかのように考えていました。京都から遠く離れた蝦夷地は、追手の来ない場所であったと考えられます。あの源義経が、衣川の合戦で死ぬことなく、弁慶とともに蝦夷地に落ち延びて大陸に渡り、チンギス汗になった、というような「義経伝説」が残り、また、その義経の足跡とされるものが北海道のいたるところに残されているのです。

しかし、やはり本格的に蝦夷地を開拓したのは明治以降、少なくとも、現在の北海道の原型はその時に作られたのではないのでしょうか。そして、その開拓の中心は「農業」です。稲作だけでなく、畜産業などを中心に行った、その明治の開拓の中心的な存在が「札幌農学校」であったのです。

特に北海道大学構内にある「札幌農学校第二農場」は、北海道畜産発祥の地として重要文化財に指定されています。ここは歴史スポットとしてはもちろん、北

海道らしい風景として絵画のモデルにもなる場所です。かの有名なクラーク博士が模範的農場施設として残したといわれ、特にホルスタイン乳牛を北海道に広めた功績は高く評価されています。

また、1876年に北海道大学の前身、札幌農学校が開校してから現在に至るまで130年余の研究成果を展示している博物館「北海道大学総合博物館」もあります。ここには400万点を超す貴重な学術標本・資料が所蔵され、一般展示公開も行なっています。大学の施設であるため入場は無料なのです。

もしも、留学生が発展途上国からきて、農業を中心にした国づくりを目指すということであれば、絶対に、ここは行かなければならないのではないかと思います。実際に、日本で「楽しみながら学んだ」ということが実感できる場所ですし、また日本人も「艱難辛苦を乗り越えて、今の日本の繁栄を築いた」ということが実感できるのではないのでしょうか。

なお、ここをお勧めするもう一つのポイントが「北海道大学の学食」です。学食ですからかなり安く、北海道の食材を使った料理を楽しむことができます。少々懐具合の淋しい留学生であっても、十分に舌で北海道を感じることもできるのではないのでしょうか。

2. 中級編

開拓時代、要するに明治以降の北海道を学んでいただいた後は、やはり「それより前はどうなっていたのか」ということを学んでいただきたいと思います。

少し書きましたが、ここで紹介するのは「松前城とその城下町」でしょうか。もともと、記録に残るところでは文安5年とありますから1448年に、この地で「北部王家」を僭称（せんしょう）していた新田氏を、その居城である順法寺城

で守護大名の南部の配下の蠣崎蔵人（かきざきくろうど）が陰謀によって殺しました。そして、その地の近くである「大館」に屋敷を構えたことが、日本の武士の蝦夷地での記録になります。また、それ以前にも建武の新政をしていた 1300 年代から日本の守護大名は蝦夷地に入っていたようで、その末裔が陰謀で殺された「新田氏」であるということのようです。

その後蠣崎氏が蝦夷地を治めますが、元々寒冷地で米の生育が少ないために、海産物、いわゆる「俵物」といわれるものを作り、中央と貿易をすることによって生計を立てていたとされています。

この蠣崎氏も、もとは清和源氏の流れをくむ人物で、若狭の武田氏（有名な甲斐の武田氏とは違う）の末裔といわれています。その蠣崎氏が江戸時代になって、「松平の松」と「前田の前」をとって「松前」と改名し、そのまま蝦夷地の大名として江戸時代を生き抜くことになるのです。

さて、松前城は、もともこの松前氏の居館であった「福山館」を、江戸時代末期に「ロシアに対して対抗できる城郭を作る」ということで、作られた江戸末期の城です。元々は函館に作る予定でしたが、函館に城を作ると、経済を担っている商人が移転しなければならず藩の財政が持たなくなると思った松前氏が、自分の館を改修することで城を作ったのです。ロシアに対抗するというので、海に向かった雛壇式の廓で戦艦からの砲撃に耐えられるような造りになっています。

しかし、榎本武揚率いる「共和国軍」に攻められて簡単に落ちてしまうのです。というのも、海に対する防御はしっかりしていましたが、陸上、要するに搦手（からめて）側の防御は手薄で、なおかつ、松前の軍が戦争に不慣れであったために、大砲を定期的に撃つ為に門を開いていた。そのタイミングを計って土方歳三率いる 700 の軍が一気に城の中に入って、開戦から 5 時間で落城するというよう

な戦いの舞台になったのです。

よしや身は蝦夷が島辺に朽ちぬとも魂は東（あずま）の君やまもらむ

これは、新撰組の土方歳三の辞世の句といわれています。土方歳三といえば、剣一筋の人という感覚がありますが、実は趣味が俳句で「豊玉（ほうぎょく）」という俳号を持っていたほどの風流人です。まさに、この松前城を落としたのち、函館の地で官軍の銃弾に斃れてしまうのですが、その時にこのようなことを思っていたのではないのでしょうか。

さて、松前城を見たら、城下町を歩きます。この城下町の特徴は、本州の城と違って、早くから俵物の貿易によって城下を形成していたということで、もちろん米蔵などがありますが、それ以上に商業地と漁民を重要視していたということです。その商人に関しては、松前の城下だけでなく函館を一大貿易港にし、そこから日本海側を酒田、そして富山、金沢とまわり京都に、一方太平洋側は、今の岩手県宮古から仙台まで、仙台からは陸路を使って江戸にいていました。

京都との貿易で回った都市は、全て「小京都」といわれるようになり、様々な特産品を積んで、船が松前や函館に戻るといったような状況になっていたのです。

日本の大名は「石高」によってランキングされていましたが、この松前藩は石高よりも商業を中心にした収入と藩の財政をになっていた特徴のある城下町です。同時に、船の仕事が多いので、それなりに信仰も深く、寺町などはさまざまな歴史的なものも集まっているのです。

それらを見て回るだけでもなかなか面白い場所ではないのでしょうか。

3. 上級編

「蝦夷地」といわれていた北海道の歴史を知ると、その「蝦夷地」の開拓を任された人々の「精神的な支え」はどうなっていたのか、ということが疑問になります。ここで、北海道の人の信仰ということを考えてみようと思います。

北海道に開拓に行った人の中心的な内容は、やはり「北海道神宮」でしょう。由緒書きによれば、

明治2年、当時「蝦夷地」等と呼ばれていた北海道は、日本の国土としてより明確にする為に、「北海道」と名づけられました。そして同じ年の9月1日に、明治天皇の詔（みことのり）（天皇のおことば）により、東京で「北海道鎮座神祭（ほっかいどうちんざしんさい）」を齋行（お祭を行う事）して、北海道の開拓・発展の守護神として、大国魂神・大那牟遲神・少彦名神の三柱の神々（開拓三神（かいたくさんじん）といいます）が鎮齋（ちんさい）されました。

その御霊代（みたましろ）（神様が宿った依代。鏡や剣等々…）は東京から函館へ、そして札幌へと移されました。明治3年5月には仮社殿が建てられましたが、それは現在の鎮座地（神様の住まれる神社の建っている所）ではありませんでした。現在の位置に社殿が建てられたのは、明治4年のことで、この年に「札幌神社」と社名が決まりました。

そして開国を決断され、西洋の文明を取り入れて現在に至る日本の礎を築かれた明治天皇を昭和39年増祀（ぞうし）（その神社にお祀りする神様が增えること）し、社名も「北海道神宮」と改称しました。

<以上抜粋>

とあります。歴史がある神社というよりは、東京や本州から神様を連れてきて祀

った神社です。現在では、この「開拓三神」に加えて、この地に神をもたらした明治天皇も祀り、四柱の神を祀っている神社になります。

さて、この北海道神宮は「蝦夷地一の宮」といわれますが、正式に一の宮となったことはありません。同時に、この神宮は、松前藩があった時に松前神社などもあり、また函館には函館八幡宮などもあったので、後発の神社であることは間違いありません。しかし、造営の時に天皇陛下から直々にお達しがあったということで、「事実上の一の宮」として、文献に何度かそのように書かれているのです。

さて、この神社を「上級」にしたのは、深い訳があります。

神社の社殿は普通東向きや南向きに作られます。これは、日本の神の中心が「天照大御神」で太陽の信仰が強いために、朝日を好むということからそのようになるのです。しかし、この北海道神宮の社殿は北に向かっています。

一つには「北を開拓する」という意識から、開拓三神が北をよく見ることができるようそのような社殿配置にしたという説もありますが、別な説もあるのです。

初代、この造営を依頼されたのは島義勇（しまよしたけ）という人ですが、この人は非常に壮大な計画をする人で、すぐに予算が無くなってしまいます。そのために造営半ばで予算を使い果たしてしまい、北海道開拓使長官と対立してしまっただけで、そのまま解任されてしまうのです。そのあとを受けたのが岩村通俊（いわむらみちとし）という人物。島は解任後出身地の佐賀に戻り佐賀県令になりますが、江藤新平らに担がれ佐賀の乱を起こしてしまい、刑死してしまいます。

さて、北海道の人は、島義勇のことを「開拓の父」と呼んでいましたから、この島の刑死は非常に衝撃だったらしく、「あの島さんを殺した政府とは一線を画す」ということで、「北海道神宮を東京とは逆向きに作った」というような説も

あるのです。

当時、北海道の開拓は、会津や二本松などの「戊辰戦争に負けた士族」が多かったために、佐賀の乱にシンパシーを感じていた人も少なくなかったのではないかと思います。同時に、その佐賀の乱の鎮圧で、政府に対して反感をもって「さやかな抵抗」をしたのが神社の社殿の向きになったのかもしれない。

このような、開拓当時の話や微妙な力関係など、さまざまな背景があるのが、この北海道神宮になります。建物の位置や向きに一つ一つ意味があり、その意味を留学生がわかるようになるまでには、さまざまな歴史や日本の神に対する考え方を理解してもらわなければなりません。もちろんそのようなことを説明しなくても、北海道神宮は良い観光名所ですが、できれば、そのような歴史も全て説明して、留学生にゆっくりと札幌の歴史を味わっていただきたいと考えます。